

プロ野球とJリーグのデータ分析

高林喜久生ゼミ

佐原豪・岡崎晃典・井上聖一朗・海老原太郎

木曾聖子・鮫島和子・角川知里

I. 問題意識と論文構成

我が国のプロスポーツリーグは、日本プロ野球が1934年に始まり、2012年には78年目を迎え、また、サッカーJリーグは1993年にスタートし、今年で19年目を迎える。日本プロ野球選手会とJリーグの理念やそれを実現するための取り組みを見てみると、次のように示されている。

【日本プロ野球選手会】¹⁾

・日本プロ野球選手会は、会員であるプロ野球選手の地位の向上のための諸活動にとどまらず、むしろプロ野球発展の一翼を担う存在として、プロ野球の未来を考え、将来のプロ野球選手候補である少年たちの憧れの場であり続けるためには何をすべきかを議論し、実現に向けて活動するという重要性を重視しています。(後略)

・(前略) 現在は、社団法人日本プロ野球選手会と労働組合日本プロ野球選手会の2つが併存し、選手の地位向上に関する諸問題への取り組みのみならず、全国各地での野球教室や各種チャリティ活動など公益的な活動にも精力的に取り組んでいます。

【Jリーグ】²⁾

誰もが気軽にスポーツを楽しめるような環境が整ってはじめて、豊かなスポーツ文化ははぐくまれます。そのためには、生活圏内にスポーツを楽しむ場が必要となります。

そこには、緑の芝生におおわれた広場やアリーナやクラブハウスがあります。誰もが、年齢、体力、技能、目的に応じて、優れたコーチの下で、好きなスポーツを楽しみます。「する」「観る」「支える」、スポーツの楽しみ方も人それぞれです。

世代を超えた触れ合いの輪も広がります。

自分が住む町に「地域に根差したスポーツクラブ」があれば、こんなスポーツライフを

1) プロ野球選手会公式ホームページ「日本プロ野球選手会とは」・日本プロ野球選手会がめざしていくもの」<http://jpdpa.net/purpose//> を参考

2) Jリーグ公式サイト「百年構想」<http://www.j-league.or.jp> を参考

誰もが楽しむことができます。

このようなＪリーグの理念を分かりやすく訴求するために、Ｊリーグは「Ｊリーグ百年構想 ～スポーツで、もっと、幸せな国へ。～」というスローガンを掲げ、「地域に根差したスポーツクラブ」を核としたスポーツ文化の振興活動に取り組んできました。（後略）

プロ野球・Ｊリーグ共に、公益的活動の他に、それぞれの普及をめざした活動を行っていることがわかる。これは、地域に根ざした普及活動が、我々の体力の増進や趣味の広がりにとどまらず、野球ならびにサッカーの振興に結びつくことにもなる。

このような取り組みの結果、プロ野球とＪリーグとは、歴史の長さは明らかに違うが、現在における人気・普及は歴史の差を感じさせないほど、国民に浸透している。しかし、プロ野球とＪリーグではリーグ構成、選手育成、報酬といった点で大きく異なることも事実である。

以下では、野球とサッカーのゲームとしての比較、スポーツビジネスとしての国際比較、アマチュアスポーツの育成、プロスポーツとしての年俸格差、の４つの観点から考察していきたいと思う。

本論での構成は以下の通りである。

Ⅱ．「野球とサッカーの違い」

ここでは、人数・攻守・道具・試合時間・移籍方法・年間試合数・賭博・発祥・決着・世界大会・ボールサイズ、以上の 11 項目について、調査・比較する。

Ⅲ．「日本と海外におけるスポーツビジネスの相違」

ここでは、野球とサッカーの海外における人気や、産業としてのスポーツをリーグ総収入や平均観客動員数、および入場料、プレミアムリーグの経営の特徴から考察する。

Ⅳ．「アマチュアスポーツの育成分析、アンケート」

ここでは、野球とサッカーの育成方法の違いを確認するため、関西学院大学の体育会硬式野球部・野球サークル・体育会サッカー部・サッカー／フットサルサークルの合計 191 名に以下のアンケート調査を行った。

始めた時期・小学校時の所属・中学校時の所属・高校時の所属・代表／選抜チームに選ばれた経験の有無・選ばれた場合の組織の内容・選ばれた時期・出身地、以上 8 項目の調査を行った。

Ⅴ．「プロスポーツの年俸分配分析」

プロ野球選手とサッカー選手との年俸の開きは大きい。これら二つのプロスポーツリーグは我々外部の人間から見る限り、年俸に現れる格差ほどの人気・普及の格差を見ることはできない。

ここでは、ジニ係数を使い、初めにプロ野球・Ｊリーグそれぞれの年俸格差を調べ、次

にプロ野球選手とＪリーガーの年俸格差を調べ、最後に勤労者とスポーツ選手の収入格差を比較する。

Ⅵ. 「格差の原因として考えられるFA」

ここでは、上記の調査で明らかとなったプロ野球選手とＪリーガーの年俸格差の原因はプロ野球におけるFA（フリーエージェント）にあるのではないかと予測し、FAの影響・FAによる移籍人数・シーズン平均順位と獲得したFA選手数の関係等について球団ごとに調査する。

Ⅱ. 野球とサッカーの違いについて

1. 野球とサッカーの歴史

どちらも日本人が子供の時から親しんでいるスポーツであるが、その要因は二つのスポーツのルールが全く異なるところにあるだろう。

野球とは、主に競技の発祥国とされているアメリカ合衆国を始め、キューバやドミニカ共和国などのカリブ海周辺の諸国、日本や韓国、台湾などといった東アジア地域の国や地域を中心に行われている球技スポーツである。2つのチームに分かれ、攻撃と守備を交互に繰り返し点を取り合って勝敗を決めるというスポーツである。協議を行うには様々な道具が必要とされているが、主にボール、バット、グローブがあれば行うことができる。³⁾

サッカーは、世界で最も盛んなスポーツの1つで、200を越える国や地域で親しまれている。日本やアメリカなどでは「サッカー (soccer)」という名称が浸透しているが、世界的には「フットボール (football)」の名で親しまれている。主に足を使って1つのボールを操り、相手のゴールにボールを入れるという非常にシンプル且つ奥の深いスポーツで、イングランドやイタリア・スペイン・ドイツ・ブラジル・アルゼンチン・メキシコなどではスポーツの枠を越えた「文化」「人生」として多くの人に愛されている。⁴⁾

Ｊリーグとは、日本プロサッカーリーグ（英訳：Japan Professional Football League）の略称である。主催団体は財団法人日本サッカー協会（JFA）、社団法人日本プロサッカーリーグで、主管団体はＪリーグに加盟する各クラブとなる。現在はＪリーグ ディビジョン1（J1）とＪリーグ ディビジョン2（J2）の2部制で、日本国内の29都道府県に本拠地を置く40のプロサッカークラブが加盟している（J1に18クラブ、J2に22クラブが所属）。

一方、プロ野球を統括する組織は社団法人日本野球機構である。日本プロ野球（NPB = Nippon Professional Baseball Organization）はセントラル・リーグ及びパシフィック・リー

3) 野球用品専門店スワローズスポーツ <http://www.4860.jp/> を参考

4) サッカーの歴史と現状 <http://kojo-com.main.jp/nyuumon.00101soccer.page01.html> を参考

グから構成される。両リーグともに6球団が存在し合計12球団から構成され、それぞれに2軍球団が存在する。

野球の発祥は、先行人類の時代にはすでに現代のボールと同じ大きさの石が使われていたことが確認されていることから、野球の発祥は大変古いとされる。12世紀ごろのフランスで、2チームに分かれ、手足や木の棒などを使い敵陣にある2本の杭の間にボールを通す「ラ・シュール」というスポーツが始まった。このスポーツは様々な球技の原型とされており、これがのちに様々な変化を帯び、地を変え、たくさんの人の生活に活気をもたらしたとされる。

現在の野球の特性を持つスポーツとして誕生したのは、アメリカのアレクサンダー・ジョイカートライトという人によって最初のルールが作り上げられた1845年である。この時のルールは、14項目から成り立っていたとされるが、20項目、15項目、13項目という説も有る。今の野球とは大きく違うルール（投手はアンダーハンドで投げる、両チームとも攻撃を同じ回数を行い先に21点取った方が勝ち、など）も含まれていたが、今に生きているルール（ベース間の距離は90フィート（27.43m）、スリーアウトでチェンジ、ファウルのときは得点も進塁もできない、など）もある。スポーツとして誕生した後もルールの変更を繰り返している。ルールの度重なる変更の狙いは「試合時間の短縮化」と「試合のスリリング化」の2つが挙げられる。

日本での野球の始まりは、1872年（明治5年）に開成学校（東京大学の前身）のアメリカ人教師であるホエレス・ウィルソンが、生徒にベースボールを教えたことだとされている。⁵⁾

サッカーの発祥においても、野球と同様、古代から存在されていたとされる。神事や祭事に際し、「投げる」「捕らえる」「打つ」「的を射る・通す」など手を基本とする競技ばかりでなく、「大幅な動き」や「蹴る」など、脚や足の動作を伴う競技が行われてきた。これがフットボールの原型であると言えるだろう。

19世紀後半になって、当時の上級階層の子弟が通う、公認私立中学校（パブリック・スクール）では、各学校ごとの実状に合わせたルールで、フットボールが行われていた。サッカーとラグビーが混在する状態である。1963年10月、ロンドンとその郊外クラブの代表者が集まり、『フットボール・アソシエーション＝FA』を設立し、12月にはルールが統一された。このルールによる競技、「アソシエーション・フットボール」は、現在でいうサッカーとラグビーを分けることとなり、単に「フットボール」で世界各地で通用するようになった。現在では「サッカー」という競技名を用いているのは、一部の国にしかならない。

5) プロ野球前史 <http://probabaseball.ojaru.jp/chronological-baseball.html> を参考

イングランドサッカー協会（The FA）創設から 10 年後である 1873 年、英国海軍教官団の A.L. ダグラス少佐と海軍将兵が来日した。その際に東京築地の海軍兵学寮（のちの海軍兵学校）で日本人の海軍軍人に訓練の余暇としてサッカーを教えたのが、日本でサッカーが紹介された最初というのが定説になっている。⁶⁾

オリンピックにおいて、野球は 1992 バルセロナオリンピックから、サッカーは第 2 回バリオリンピックから正式競技となっている。⁷⁾

2. プロ野球とＪリーグの違い

図表Ⅱ - 1 プロ野球とＪリーグの違い

	プロ野球	Ｊリーグ
人数	9	11
攻守	分かれている	分かれていない
ボール以外の道具	使用	不使用
試合時間	最大 3 時間半	45 分ハーフ
年間試合数	約 144 試合	約 40 試合
移籍方法	FA、トレード	レンタル移籍等
賭博	なし	サッカーくじ
発祥	アメリカ	イギリス
決着方法	日本のみ引き分けあり 大リーグは決着がつくまで	引き分けあり
世界大会	オリンピック WBC	オリンピック W 杯
ボールサイズ	硬球：重量 141.7 ～ 148.8g 円周 22.9-23.5 (公認野球規則)	・皮革または他の適切な材質 ・外周が 70cm (28ins) 以下、 68cm (27ins) 以上 (サッカー競技規則)

(出所) 日本野球連盟『公認野球規則 2011』、日本サッカー協会『サッカー競技規則 2010/2011』などより筆者作成

1 チームに対しての年間試合数は、プロ野球は、公式戦が 5 チームに対し各 24 試合で計 120 試合、セ・パ交流戦が 6 チームに対し 4 試合で計 24 試合、全部で年間 144 試合である（日本シリーズ、プレーオフを除く）。

Ｊリーグは、最低でもリーグ戦 34 試合にカップ戦 6 試合行われる。カップ戦を勝ち抜いた場合、ACL（アジアチャンピオンズリーグ）を勝ち抜いた場合」は試合数がさらに増

6) 財団法人日本サッカー協会 <http://www.jfa.or.jp/jfa/history/index.html> を参考

7) Jリーグ公式サイト <http://www.j-league.or.jp/> を参考

えていく仕組みとなっている。⁸⁾

移籍方法はそれぞれが特徴的である。プロ野球の移籍方法であるFA(フリーエージェント)については後の章で述べる。

Jリーグのレンタル移籍は、プロスポーツにおいて、選手が現在所属しているチームとの契約を保持したまま、期間を定めて他のチームへ移籍する制度である。期限付き移籍、リース移籍とも呼ばれる。レンタル移籍では、通常の移籍(完全移籍)にしばしば見られる移籍金が発生しない代わりに、移籍先のチームから移籍元のチームに対してレンタル料を支払う、または選手報酬の支払いを肩代わりするという形態が一般的である。

賭博はサッカーにのみ存在する。一般的にはサッカーくじと呼ばれ、TOTO(トト、トトカルチョより)の愛称で有名だ。正式名称はスポーツ振興投票で、根拠法はスポーツ振興投票の実施等に関する法律(1998年5月10日法律第63号)。なお、「スポーツ」とついているが、実際にはプロサッカーのみが対象で、これ以外のプロスポーツを対象とするには法律の改正を要する。文部科学省の指導監督のもと独立行政法人日本スポーツ振興センターにより運営・発売が行われている。つまりは、Jリーグの指定された試合の結果あるいは各チームの得点数を予想して投票し、的中すると払戻金を受けることのできる公営ギャンブルである。⁹⁾

Ⅲ. 日本と海外におけるスポーツビジネスの相違

1. 産業としてのスポーツ

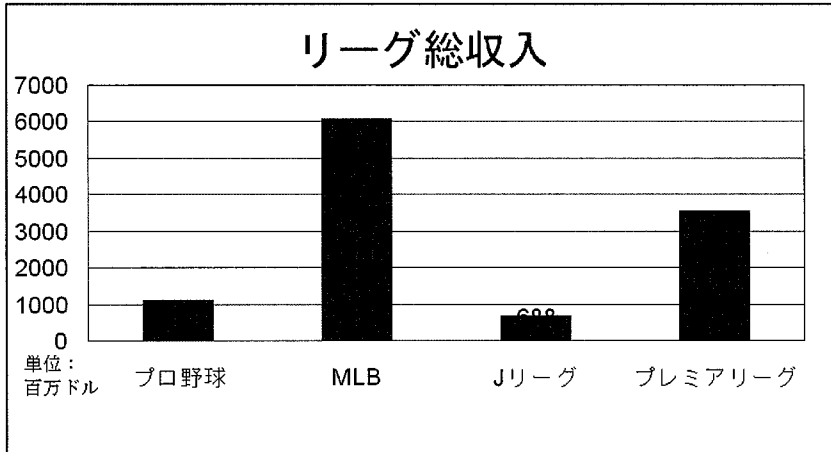
この章では、日本の野球、サッカーのプロリーグと海外のプロリーグを比較する。今回は、海外の野球で最もビジネスとして成功しているメジャーリーグベースボール(MLB)、サッカーで最も成功しているイギリスのプレミアリーグと日本のそれぞれのリーグで考えることにする。

8) Jリーグ公式サイト <http://www.j-league.or.jp/> を参考

9) toto 公式サイト <http://www.toto-dream.com/index.html> を参考

A) リーグ総収入 (2007)

図表Ⅲ - 1



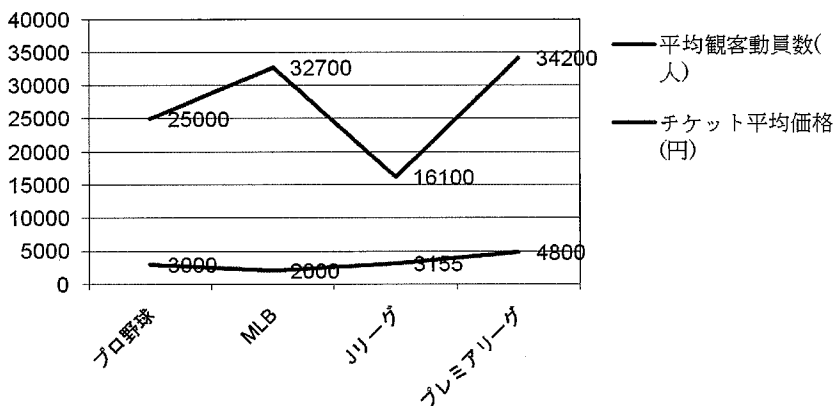
(出所) スポーツマネジメントにおける新たな価値創造の在り方

http://www.waseda.jp/sem-inoue/file/archives/2011_sotsuron_sports.pdf#search='プレミア%20総収入' より筆者作成

上図から分かるように野球、サッカー共に日本と海外では6倍程度、収入に差がある。日本の人口が約1.3億人、アメリカが3億人、イギリスが6000万人ということを加味しても相当な開きがあるといえるだろう。ではこの差はどこからきているのだろうか。

B) 平均観客動員数、及び入場料

図表Ⅲ - 2 平均観客動員数と入場料



(出所) 「プロ野球フリーク」 <http://baseball-freak.com/audience/>

「ESPN」 <http://espn.go.com/mlb/attendance> より筆者作成

(データはプロ野球、Jリーグ、MLBは2011シーズンのもの、プレミアリーグが2009シーズンのもの)

平均観客動員数、入場料にはそれぞれ特徴がある。MLBの入場料は日本のプロ野球と比較してみると若干安く、観客動員数も多い。MLBの入場チケットは安価な割に家族、子供向けのサービスが非常に充実していたり、フードサービスが充実していたりと非常に良心的である。アメリカで人気のアメリカンフットボール (NFL) やバスケットボール (NBA) のチケットが割高で入手し辛いのに比べ、家族や友人と気軽に観戦に行ける感覚であるらしい。このことから MLB は国内の人気スポーツに対抗し独自のサービスを展開することで差異化を図りビジネスモデルとして成り立っていると考えられる。

一方、サッカーはというと、プレミアリーグの入場料がJリーグよりも高いにも関わらず観客動員数には圧倒的な開きがある。これは、サッカー市場で最も成功しているプレミアリーグの経営手法が関係していると思われる。

C) プレミアリーグの経営の特徴

現在世界で最も成功しているスポーツ産業だと言われるプレミアリーグ。その成功のキは、何と言っても巨額な TV 放映権料にある。

プレミアリーグの大きな収入の柱は TV 放映権料、スタジアム入場料、関連商品販売の 3 つ。このうち TV 放映権料は、海外放映権収入の大幅増により 2010-11 シーズンには過去最高を記録した。具体的な金額は明らかにされていないが同リーグの海外放映権は他の欧州主要リーグに比べはるかに高額(ドイツリーグの約 10 倍、イタリアリーグの約 5 倍等)と言われている。

① PL シェア

TV 放映権およびスポンサーシップ料

各クラブ一律 3,170 万ポンド (約 40 億 8,940 万円)

内訳: 国内放映料 1,380 万ポンド、海外放映料 1,790 万ポンド

② メリットマネー

20 位で終了したクラブには 75 万 6,000 ポンド (約 9,800 万円) が与えられ、それから 1 つ順位が上がるごとに同額が加算される。

例: 19 位の場合 $75 \text{ 万 } 6,000 + 75 \text{ 万 } 6,000 = 151 \text{ 万 } 2,000 \text{ ポンド}$ (約 1 億 9,600 万円)

18 位の場合 $151 \text{ 万 } 2,000 + 75 \text{ 万 } 6,000 = 226 \text{ 万 } 8,000 \text{ ポンド}$ (約 2 億 9,400 万円)

1 位のマン U が受け取る金額は 1,510 万ポンド (19 億 6,000 万円)

③ TV 生放送料 (Live TV)

リーグ戦 1 試合あたりのテレビ生放送料は 58 万 2,000 ポンド (約 7,580 万円)

各クラブには最低 10 試合分 582 万ポンド (約 7 億 5,800 万円) の支払いが保証されている。

さらに、生放送回数が多いマン U (23 回) やチェルシーおよびリバプール (各 21 回) 等

の人気クラブにはその回数に応じて加算額が支払われる。

この3要素を加算すると、2010-11シーズンに上位4クラブが受け取る金額は次のようになる。

- 1位マンチェスター・ユナイテッド 6,040万ポンド (約78億6,200万円)
- 2位チェルシー 5,770万ポンド (約75億1,100万円)
- 3位マンチェスター・シティ 5,550万ポンド (約72億2,400万円)
- 4位アーセナル 5,620万ポンド (約73億1,500万円)

一方最も低額だったのは、19位でシーズンを終えたブラックプールで総額は3,910万ポンド (約50億9,000万円) で最高額を受け取るマンUとの差は約1.6倍。各クラブが個別にTV放映契約を結ぶスペインの場合その差は19倍とも言われており、プレミアリーグのシステムは全クラブに対して比較的フェアであることがわかる。

2. 小括

プロ野球での放映権は各チームで行い、チームによってその収入の差が大きく、経営面での偏りも激しい。これにより、戦力均衡の傾きに繋がり、観る者の興味・関心を薄めることになる。尚、プロ野球の経営は他の3リーグが地域名をチームに付けているのに対して、企業名を付けていることから分かる様に企業宣伝の意味合いが強いことも問題である。一方、Jリーグにおける放映権は、Jリーグが一括して管理と中継を行う放送局を決める。先述したプレミアリーグと同様の手法ではあるが、年間35億円程度と、2796億円、1チーム平均139億円もの収入が見込まれるプレミアリーグとは比べ物にならない。また、MLBもこの手法を採用しており、視聴率は国内最大人気のアメリカンフットボール(NFL)と比べ圧倒的に低視聴率であるもののそれに見合わない高額な放映権料を獲得している。更にMLBは観客動員数増加の為に独自戦略により収入を増やした。プロ野球以外の3リーグの手法の最大のメリットとして比較的フェアなシステムであることからリーグ内の戦力均衡が図り易いことがある。戦力の均衡により試合はより面白いものとなり、観客動員数・収入が増え、他リーグの人気選手を獲得出来るといったと良い流れを生み出すことが出来る。プレミアリーグと同様の経営手法をとるJリーグの低い放映権料、低収入の理由は、第1に日本がサッカーに関しては後進国であること。そして第2に実力のある人気選手がプレミアリーグをはじめとしたサッカー先進国である海外リーグへの移籍などが考えられる。

IV. アマチュアスポーツの育成分析、アンケート結果

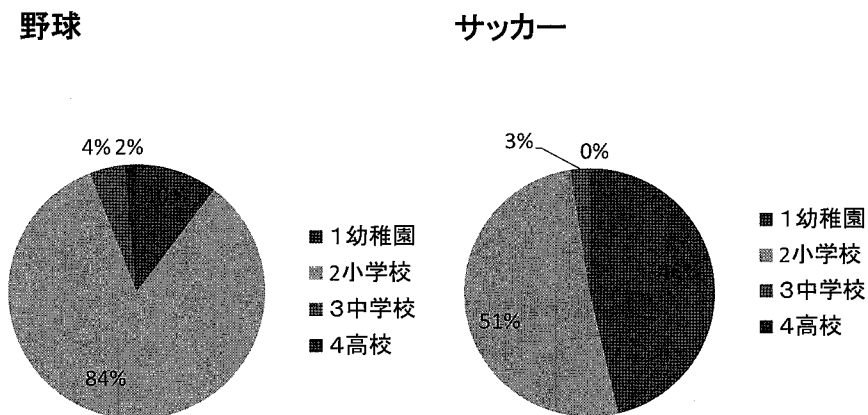
プロ野球選手もJリーグ選手も、アマチュアを経てプロに入る。そして、その力はアマ

チュア時代に培われる。本章では、アマチュアスポーツとしての野球とサッカーの選手の育成方法がどのように異なるか分析する。

その手法として、我々は2011年10月に関西学院の1年生から3年生の体育会硬式野球部72人、野球サークル23人、体育会サッカー部51人、サッカーサークル45人を計191名を対象に野球・サッカーの「育成方針」についてアンケートをとった。

1. 独自のアンケート調査によるアマチュアスポーツの育成分析

図表IV-1のQ1. いつから始めましたか？



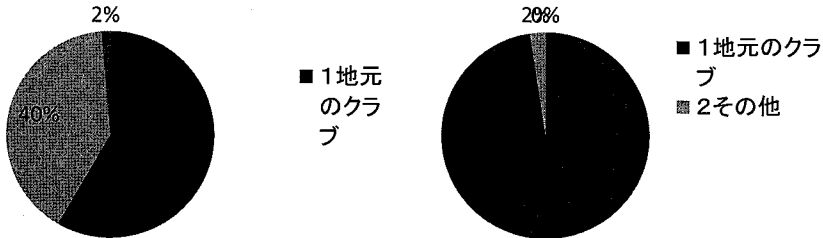
(出所) 独自アンケートより作成

図表IV-1のQ1のグラフ「いつから現在所属している競技を始めたのか」の問いに対して、野球は10%、サッカーは46%の人が幼稚園から始めている。小学校からは野球が84%、サッカーが51%となる。このデータからわかることはその競技の行いやすさだと我々は考察している。野球はキャッチボールができて、人数がそろわないと競技が成立しない。またバットは幼稚園児用がないため、扱うのが難しい。一方、サッカーは一人でも練習方法はたくさんある。また、サッカーはボール一つでできることから金銭的に負担が少ない。野球はグローブ、バット、ボール、手袋、スパイク、キャッチャー防具などの道具がたくさん必要となってくる。さらに、野球はサッカーに比べ走る・投げる・取る・打つ・の様々な要素が含まれているため、体ができていないとプレーしにくい点がある。

図表IV-2のQ2. 小学校の所属していた組織

野球

サッカー



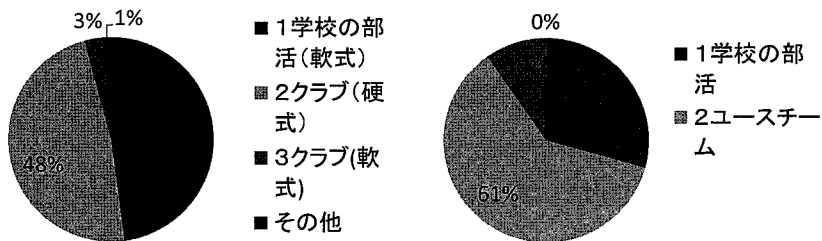
(出所) 図表IV-1と同じ

図表IV-2のQ2のグラフ「小学校のとき所属していた組織」について、野球は地元のクラブが58%、学校のクラブが40%と大きな誤差はうまれなかった。サッカーも98%ほぼ全員が地元のクラブに所属した。ここでは「地域性」がキーワードとなる。

図表IV-3のQ3. 中学校の時に所属していた組織

野球

サッカー



(出所) 図表IV-1と同じ

図表IV-3のQ3のグラフは「中学の時に所属していた組織」について野球は軟式と硬式クラブ48%ずつにわかれる。軟式というのは一般的にゴム製の素材で作られており、主に小・中学生に使用されている。一方、硬式は高校野球やプロ野球が使用するボールと同じである。硬式ボールは球の重量、大きさ、硬さが軟式ボールに比べてすべてにおいて

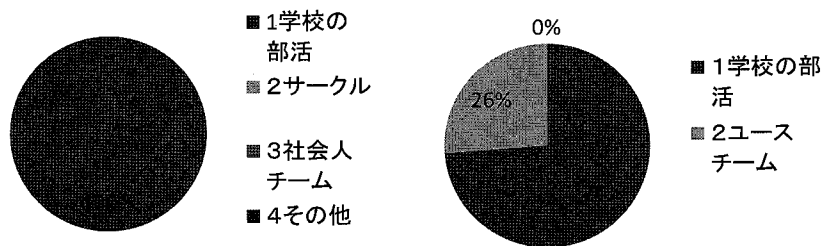
上回る。体が比較的に小さい選手は軟式に行くケースがある。また、硬式クラブは過密地域に多く存在し、過疎地域は子供の数が少ないため硬式クラブは少ない。そのことにより中学校（軟式）に所属する生徒が多くなる。こういった人口よっての機会も関係してくる。軟式用具に比べて硬式用具は丈夫に作られているため費用への負担が大きい。

一方、サッカーは小学校では地元のクラブに所属する生徒が多かったものの中学校になると29%が学校、60%がユースクラブに所属するようになる。地元クラブ離れが起きるのである。

図表IV-4のQ4.高校の時に所属していた組織は？

野球

サッカー



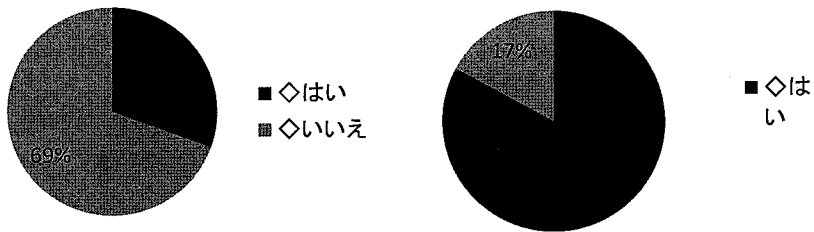
(出所) 図表IV-1と同じ

図表IV-4のQ4のグラフ「高校のときに所属していた組織」について野球は、アンケートを取ったすべての人が学校の部活に所属していたと回答した。この結果は高校野球という組織の大きさを示している。高校野球をしているものとして誰もが憧れる甲子園出場が大きな目標となっていることが大きい。

またサッカーは学校活に所属しているが、ユースクラブに所属している人より多かった。高校野球の甲子園と同様に、サッカーも全国高校サッカー選手権大会があり、多くの人々がそれを目標にして頑張っている。高校でユースクラブに所属している人は、プロを目指している人が多いため、よりプロに近い環境で練習できることが強みである。全国サッカー選手権大会同様にユース選手権大会も行われており、プロサッカーの下部組織の日本一を決めるのである。チャンスがあればプロにも昇格できることからこのことが高校の部活をせずにクラブチームに所属することの魅力の一つでもある。

図表IV-5のQ5.代表、選抜チームに選ばれた経験はありますか？

野球サッカー



(出所) 図表IV-1と同じ

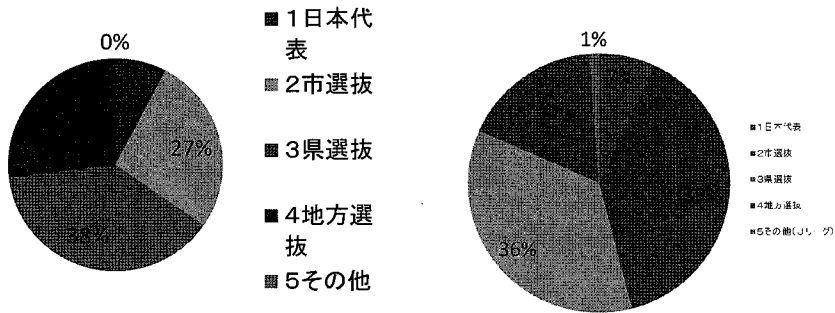
図表IV-5のQ5は、「代表、選抜チームに選ばれた経験があるか」について日本代表、県選抜、市選抜、地方選抜、その他を含めて調査した。この結果はサッカーが代表に選ばれた選手が83%と野球の31%に比べて圧倒的に多いことがわかる。野球はサインプレーが試合展開の中で大事なことからそれを浸透・連携を深めるには多くの時間を要してしまうからである。その点、サッカーは試合の中での連携、パスが野球に比べて時間を割かなくていいことから編成しやすいのである。またサッカーはサッカー日本代表がプロスポーツ最高峰としていることから選手たちが小さい時から育成に力をいれている。日本A代表は4年に1度のワールドカップに照準を合わせるが、オリンピックはU-23がメインとなる。それに至るまでにU-15、19など年代別で育成に取り組んでいる。

一方、野球はサッカーとは裏腹にプロ野球というものの自体がスポーツの最高峰としている。さらに、オリンピックはかつてプロ野球のシーズンと重なっていたためチーム事情を考えるとオリンピックチームに選手を注ぎ込むと戦力ダウンにつながるため、本来オリンピックはアマチュアが試合に出るものとされていた。だから、プロ野球選手がオリンピックに出ることは少なかった。オールプロでオリンピックの試合に出たのは2004年のシドニーオリンピックからである。最近ではプロ野球選手も出場する機会が増え、WBC(WORLD BASEBALL CLASSIC)の大会も2006年からスタートし、国際大会出場に力を入れてきた。

図表IV-6のQ6.「はい」と答えた方に質問です。それはどのような組織ですか？

野球

サッカー



(出所) 図表IV-1と同じ

図表IV-6のQ6は、「はい」と答えた方に質問です。それはどのような組織ですか？」について、硬式野球で日本代表に選ばれた人は全体の8%、市選抜に選ばれた人は27%、県選抜に選ばれた人は38%、地方選抜に選ばれた人は27%だった。一方、サッカーは日本代表に選ばれた人は全体の7%、市選抜に選ばれた人は39%、県選抜に選ばれた人は36%、地方選抜に選ばれた人は15%、その他1%だった。

2. 小括

大学の体育会硬式野球部と体育会サッカー部にアンケートをとった結果、競技によって小さい頃からの育成方法などの違いがでた。

サッカーはボール一つあればできるため、幼稚園の頃から多くの人やっていたのに対して、野球はグローブ、バットなど、野球道具がないとできないため、金銭的にも肉体的にも、野球を始めるにはサッカーよりも負担がかかりやすいことが考えられる。これは日本だけでなく世界的にみても同じことが言える。

また、サッカーの育成方法として、ユースチームに入って練習ができるため、プロにより近い環境や意識で練習することができることや指導者もプロ経験者が多い。これがサッカーの魅力である。野球は、サッカーのようなユースチームはないものの高校野球の最大の目標でもある甲子園があるため、プロ野球を目指している人も、目指していない人も高校時代に本気で野球に取り組むことができる。

また、プロ野球チームは全12球団しかないことからJリーグの38クラブ（J1 = 18クラブ J2 = 20クラブ）に比べて少ない。これはプロ野球チームとJリーグの方針の違いから生じている。プロ野球はこれ以上チーム数を増やしてしますと1チームへの人気度が減少してしまう可能性がある。それに対しJリーグは1994年に発足され、まだ歴史の浅い部門である。「プロ野球と同じことをしてはダメ！」というところからプロ野球と反対のことつまり、全国各地まではいかないが地域ごとにクラブを設け「地域密着型」の方針を行ったのである。このことがチーム数の増加、ユースチーム同士の試合の行いやすさを招いている。

一方、野球はサッカーとは裏腹にプロ野球というものの自体がスポーツの最高峰としている。さらに、オリンピックはかつてプロ野球のシーズンと重なっていたためチーム事情を考えるとオリンピックチームに選手を注ぎ込むと戦力ダウンにつながるため、本来オリンピックはアマチュアが試合に出るものとされていた。だから、プロ野球選手がオリンピックに出ることは少なかった。オールプロでオリンピックの試合に出たのは2004年のシドニーオリンピックからである。最近ではプロ野球選手も出場する機会が増え、WBC（WORLD BASEBALL CLASSIC）の大会も2006年からスタートし、国際大会出場に力を入れてきた。

V. プロスポーツの年俸分配分析

本章では、プロスポーツについて検討する。とりわけ、我々が着目したのは選手の年俸についてである。年俸が選手の評価にどのように反映され、その選手間にはどのような格差が生じるか、ということ进行分析した。

1. 先行研究

A) 高林（2004）

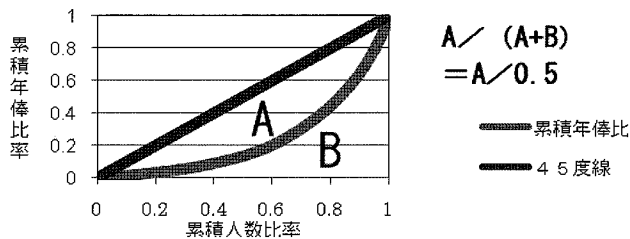
プロ野球の時代別の年俸格差比較した分析としては、高林（2004）が挙げられる。そこでは、プロ野球の各時代の年俸格差比較を「ローレンツ曲線」と「ジニ係数」を用いて検討している。「ローレンツ曲線」とそこから求められる「ジニ係数」は所得分布の不平等の程度を見るときに用いられる代表的指標である。

2003年のジニ係数0.60に対して1992年度のジニ係数は0.53となる。この間の年俸格差の拡大には、1993年にいわゆるFA制度が導入されたことが影響していると指摘している。本章では、これをさらに2011年のデータとJリーグのデータを加えて、分析を行うことにする。

B) 高林 (2005)

ジニ係数を高林 (2005) に基づいて説明する。ジニ係数とは、主に社会における所得分配の不平等さを測る指標である。ローレンツ曲線をもとに、1936年、イタリアの統計学者コッラド・ジニによって考案された。所得分配の不平等さ以外にも、富の偏在性やエネルギー消費における不平等さなどに応用される。係数の範囲は0から1で、係数の値が0に近いほど格差が少ない状態で、1に近いほど格差が大きい状態であることを意味する。

図表V-1 ジニ係数とは

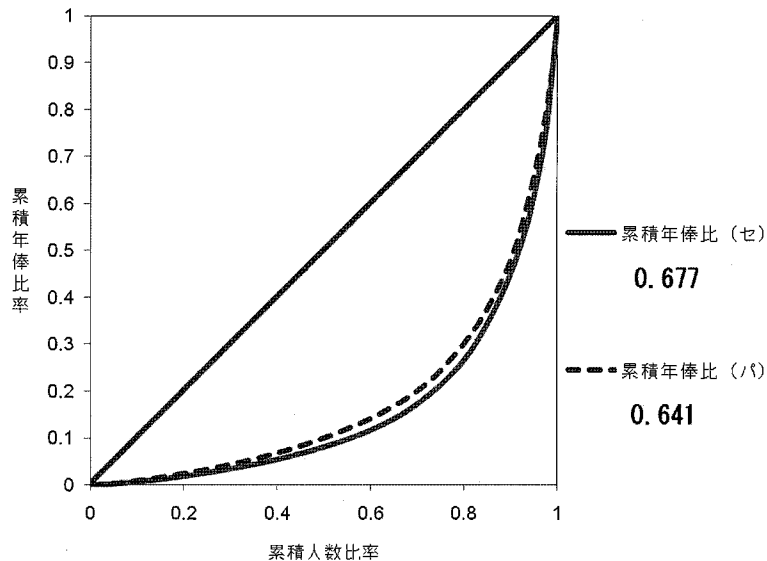


(出所) 高林 (2004) をもとに筆者作成

上の図表のように、A の45度の直線に近いほうが、格差が少ないといえる。

2. プロ野球の年俸格差

図表V-2 セリーグ・パリーグの年俸格差 (2011年)



(出所) 「プロ野球フリーク」 <http://baseball-freak.com/> をもとに筆者作成

上のグラフは、プロ野球界においての、セリーグ・パリーグの年俸格差を表したものである。ジニ係数はセリーグが0.677、パリーグが0.641となっている。数字で比較すると、セリーグの年俸格差の方が大きいことがわかる。このような結果となる大きな要因は、セリーグにてFA制度を取得し、行使している選手が多いということが決定的だ。FA制度は、選手の移籍先の球団が以前所属していた球団よりも年俸を引き上げるため、年俸格差が一層大きくなる。このFA制度については、後述する。

また、セリーグは年俸1億円を超える、いわゆる1億円プレーヤーが多い傾向がみられる。

図表V-3 パリーグの年俸格差 (2011年)

	球団名	ジニ係数
1	ソフトバンク	0.716
2	日本ハム	0.670
3	楽天	0.622
4	ロッテ	0.612
5	西武	0.606
6	オリックス	0.552

(出所)「プロ野球フリーク」<http://baseball-freak.com/> をもとに筆者作成

この表はパリーグの年俸格差をジニ係数で表し、格差の大きい方から順に並べたものである。ソフトバンクは0.716と非常に大きな格差が生じていることがわかる。これは、年俸1億円を超えるプレーヤーが11人と、他の5球団の平均5.6人に比べて格段に多いことが関係していることがうかがえる。

図表V-4 セリーグの年俸格差 (2011年)

	球団名	ジニ係数
1	巨人	0.724
2	阪神	0.701
3	中日	0.679
4	ヤクルト	0.644
5	横浜	0.633
6	広島	0.567

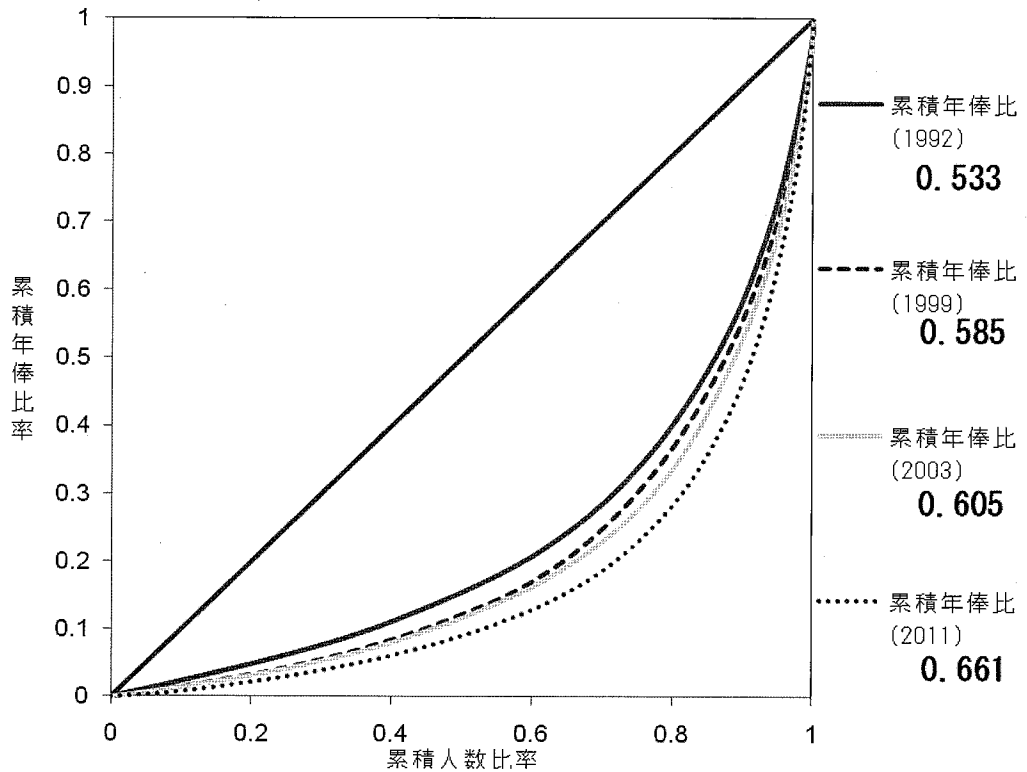
(出所)「プロ野球フリーク」<http://baseball-freak.com/> をもとに筆者作成

これは、セリーグの年俸格差をジニ係数で表した表である。この表からわかるように、

巨人が最も年俸格差が大きい。やはり、有名選手を多く抱える巨人、阪神はジニ係数0.7を超える年俸の格差がみられる。

12球団で比較しても年俸格差の大きさでは上位を占めるセリーグだが、セリーグのみで見ると、広島のみが圧倒的に低いと考察できる。

図表V - 5 1993年～2011年の年俸格差の推移



(出所) 『2011年プロ野球選手写真名鑑』、「プロ野球フリーク」 <http://baseball-freak.com/> をもとに筆者作成

この表は、1992～2011年の年俸格差の推移を表している。この10年間において年俸格差は確実に大きくなっている。

このような結果は、やはり1993年から適用開始されたFA制度が大きなポイントとなっていることは間違いない。年々、FAの取得人数が増加していることから、このグラフに比例していることがわかる。

3. Jリーグの年俸格差

図表V - 6 Jリーグの年俸 (2011年)

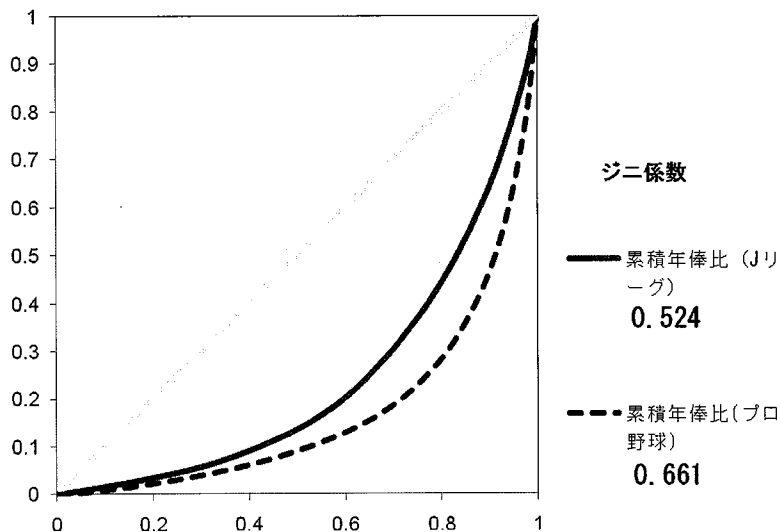
	チーム名	ジニ係数		チーム名	ジニ係数
1	ガンバ	0.555	10	甲府	0.490
2	名古屋	0.549	11	柏	0.464
3	新潟	0.518	12	磐田	0.459
4	鹿児島	0.517	13	大宮	0.451
5	川崎	0.516	14	清水	0.445
6	横浜	0.516	15	仙台	0.416
7	浦和	0.501	16	広島	0.413
8	神戸	0.496	17	山形	0.369
9	セレッソ	0.490	18	福岡	0.348

(出所) インターネット「サッカー」リーグ年俸名鑑」をもとに筆者作成

この表から、ガンバや名古屋などの、日本代表に選抜された選手が在籍するチームは年俸格差が大きい傾向がある。

4. プロ野球選手とJリーガーの年俸格差

図表V - 7 プロ野球選手とJリーガーの年俸格差



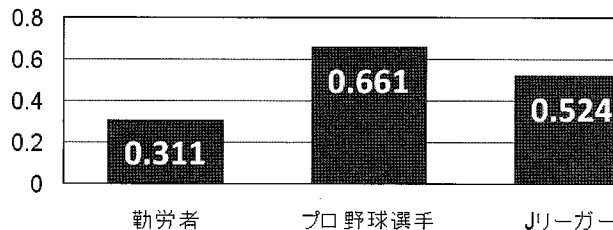
(出所) 「プロ野球フリーク」<http://baseball-freak.com/>、インターネット「サッカー」リーグ年俸名鑑」をもとに筆者作成

Jリーグに比べ、プロ野球は年俸格差が大きい。プロ野球は戦力に顕著な偏りがあるのに対して、Jリーグは戦力が均衡している。この戦力の格差が、スポーツ間の所得格差に強く結びついているといえる。

また、これに関してもFA制度が大きく影響している。プロ野球は選手の移籍先の球団が以前所属していた球団よりも年俸を引き上げるが、JリーグはFA制度がなく、移籍した際に年俸が増加する、ということはない。

5. 勤労者とスポーツ選手の収入格差比較

図表V-7 勤労者とスポーツ選手の収入格差



(出所) 総務省ホームページ「平成21年全国消費実態調査」、「プロ野球フリーク」<http://baseball-freak.com/>、インターネット「サッカーJリーグ年俸名鑑」をもとに筆者作成

この表は勤労者とプロ野球選手、Jリーガーの年俸格差を比較したものである。この表においての勤労者は、「二人以上の世帯」の世帯主を示す。

この棒グラフを一見して、世間一般の勤労者と、スポーツ選手との所得格差の大きさの違いが瞭然である。

6. 小括

日本のプロスポーツの中において、有名であり競技者の数も多いプロ野球とJリーグの年俸分配について分析した。自分達で選手年俸図鑑やホームページなどの情報から、プロ野球の分析では球団ごとの年俸格差をジニ係数の比較を行って示すことにより、リーグ間や球団ごとの格差比較を行った。そこから分析できた事はセリーグとパリーグの2リーグの中でセリーグの方が年俸の格差が大きい事がみられた。その要因としてセリーグでは年俸が1億円を超える、いわゆる1億円プレーヤーが多い傾向が見られ、更にセリーグの方がFA制度を行使する選手が多いことも理由として考察できた。続いて、Jリーグの分析ではJリーグの年俸格差はジニ係数よりプロ野球と比較を行ったが全体的に低いという結果になり、上位のチームと下位のチームを比較しても格差は小さいものとなった。そして

勤労者の年取もジニ係数を使って示し、プロスポーツとの比較を行い格差の違いを明らかにした。数値で比較することにより、新たな発見や制度の見直しの必要性が存在することが明らかになった。

VI. 格差の原因として考えられる FA

先述したように、プロ野球の年棒格差の要因が FA 権の存在と述べた。ここでは FA の在り方が格差にどのように影響を与えているか詳しく考えるのが不可欠である。

1. FA とは

日本プロ野球 (NPB) では、日本プロフェッショナル野球協約の規定に従い、NPB が定める条件を満たした選手でいずれの球団とも選手契約を締結する権利を持った選手をフリーエージェントと称し、その権利を与える制度を「フリーエージェント (FA) 制」という。前所属球団も含めていずれの球団との契約も可能にする権利を与えるもので、他球団への移籍を前提とする制度ではない。

現在のシステムは、2008 年 6 月 25 日に日本プロ野球組織と労組日本プロ野球選手会との協議交渉によるもので、FA の新たな制度を 2008 年より 2 年間試行し、成果や球団経営への影響を検証して必要があれば見直しを行うことで合意している。

かねてより獲得期限の短縮と補償の撤廃を訴え続けてきた選手会側は、実質初めてとなる譲歩案であることと、見直しの機会を設けていることを評価して試行には合意しているものの、未だ改革は不十分であるとして今後も交渉を続けていく方針である。

この制度はさほど使用されているとは言えず、FA 権利を取得する選手の数は毎年 60～70 人だが、権利行使を宣言する選手は 1 年当たり 9 人程度であり、実際に移籍した選手は 1 年当たり 4 人程度である。

国内移籍の FA 権

2006 年までのドラフトで入団した全選手 - 累計 8 年 (通算 1,160 日) 経過で取得

取得条件

2008 年 - 現在

2007 年以降のドラフトで入団した高校生選手 - 累計 8 年経過で取得
2007 年以降のドラフトで入団した大学生・社会人選手 - 累計 7 年 (通算 1,015 日) 経過で取得

海外移籍の FA 権

全選手が累計 9 年経過で取得

2. FAの影響

- ① 資金力の劣る球団から資金力の高い球団への主力選手の流出
- ② 高額なFA補償制度の存在
- ③ 外国人選手の移籍との関係で日本人選手の価値を下げてしまっている

FA選手の獲得に関して、その補償金などにかかる金額が大きすぎるために、広島やヤクルト、オリックスといった比較的金的余裕の無い球団は「基本的にFA選手を獲得しない」ことを明言している。つまり仮にそういった球団に移籍願望を選手が持ったとしても、事実上FAでの移籍は不可能になっており、また権利を得た選手も多額の補償金のために買い手がつかないことを恐れ、結局はFA権を行使せずといった例が多いとプロ野球選手会のホームページで述べられている。そして2003年オフからは「人的補償」が積極的に行われるようになったために、これから先は「自分が移籍することによって、他の選手に迷惑が掛かる」と考える選手も出てくるだろう。そうになってしまえばFA権という選手のための権利が、かえって選手の自由を奪ってしまう制度ともなりかねない。ではこういった補償の問題をどう解決すればいいのか、アメリカでは日本で言う補償金や現在のプロ選手を譲渡するといったものではなく、FA選手を獲得した球団が移籍元にドラフトの指名権を譲渡するといった形がとられている。FA選手が権利を行使しても直接的に他球団の現役選手に影響を与える事もなく、間接的にも選手を獲得した球団から、元に在籍していた球団への補償ということも満たしている。先の見えてきた実力ある選手から、将来を感じさせる若い選手へ移行するチームの新陳代謝の手助けにもなると考えられる。ドラフトとFAを関連付け戦力均衡化を合理的に図ろうとしている。

けれどもこのシステムは現在の日本では実現しそうにはない。なぜなら自由競争枠という事実上の逆指名権があるためである。しかし私は自由競争枠のシステムを廃止しても良いのではと考える。なぜならばFA資格取得の条件においても逆指名選手は10シーズン、それ以外の選手は9シーズン出場選手登録の期間の違いなど、もし逆指名が無くなれば1選手としての入団時やFA権での不公平感も無くなり、獲得補償についても上記したドラフト・ウェーバー権の譲渡といったことも可能になるからである。「痛みの伴う改革」ではないが、球界では3例目の人的補償が行われ、球団側もFA選手を獲得する事以上に、手塩にかけて育ててきた選手を他球団に譲渡する厳しい選択を迫られ、現状のFA制度の問題点を、身を持って感じたと思われる。元々が選手の権利として発展してきたFA制度なので、球団側も痛みを感じてくれている間に、より自由に行使できる権利へと改善していくべきではないかと考える。FAは選手の自由を生む為の制度であるが、その分格差を生む制度であるので、改善や新制度の導入を早急に行うべき制度であると考えられる。

3. 小括

FA 制度をふまえると球団の主張としては高い契約金の存在があり、球団は、長期間の保留制度の根拠について、高い契約金を支払っているからと説明している。

また、球団は、FA 資格を選手が取得しやすくなると、球団は選手を確保、獲得するために激しい競争をせざるを得なくなり、選手獲得費用が高騰し球団経営を圧迫することになるという意見がある。それに、対して契約金はその球団を選んだ対価であるという意見であり、両者の意見は平行線である。

外国人選手は日本にやってくる際にも契約金が払われたりする外国人選手の場合、複数年契約を締結した数年間が経過すれば他球団への移籍が自由に認められるような状況からすれば契約金はあくまで契約金であり、その球団を選択したということに対して支払われているというべきである。そうでなければ契約金の金額で拘束期間は変わるはずであるし、今はほとんど契約金なしで入団する選手も存在するからである。

こうしてみるとこの FA 資格取得条件、選手と球団間でしっかり話し合い、適切な条件に改善する必要があるといえるだろう。このような問題は、あくまで需要と供給という市場の原理により定まるべき問題である。選手獲得費用の不合理な過度の高騰については、別の方法により抑制する方法を検討することもできる。むしろ、移籍市場に一部の特別な選手しか存在しないことで、供給量が少なく、価格が高騰している、つまり市場が正常に機能していない現状を考えれば、移籍市場に合理的な人数の選手が存在する状況を作り、市場が正常に機能するようにすることを考えるべきである。Jリーグなどでは、移籍市場に選手がたくさん出ていますが、年俵が高騰するということはなく、選手の市場価値に応じた年俵の相場が形成されています。プロ野球の年俵制度は格差が非常に激しく作られているので、Jリーグのような年俵制度を考える必要がある。

VII. 総括

プロ野球とJリーグは我々に最も身近なプロスポーツである。しかし、両者には大きな違いがある。我々は、その違いがどのようなところに現われているか、なぜそのような違いが出てくるのか、多面的に検討した。

まず、ゲームとしての野球とサッカーの違いが大きい。人数の違いや、攻守が分かれているかの違いなどがある。また、野球はボール以外の道具が必要であるのに対し、サッカーは、ボールのみでゲームができる。

また、アマチュアの選手育成方針も大きく異なる。野球の選手育成は学校であるのに対して、サッカーは地域クラブが中心である。このように、サッカーは地域性があり、また、道具はボールのみで気軽にできることがうかがえる。国際的な拡がりとしては、サッカー

の方が大きいことも一つである。

次に我々は、プロスポーツにおける年棒格差分析を行って、総合的に考察出来た事は、プロ野球の年棒分配システムよりJリーグの年棒分配システムの方が優れたものであるという事が分析できた。日本では、プロ野球の方が選手知名度やテレビの放映など、ポピュラーなものであるが、選手間の年棒の格差が大きく、年棒調整が行われているJリーグと比べるとファンを楽しませる為の戦力均衡化の観点からは劣っている事が理解できた。さらに各々の年棒格差を「ローレンツ曲線」、「ジニ係数」を用いて格差を明らかなものにした。やはりスポーツのショービジネスで顧客に求められているものは、競争であり戦力の均衡化を図ることや、スター選手の集中を避ける必要があると考えられる。そこで大きく関わっていると考えられるのがFA制度であると考え、制度の仕組みや問題点の分析を行った。これらを総合して、我々は、プロ野球よりもJリーグの方が、選手育成の面でも優れており、年棒分配方法の面でも優れたものであると考察した。

VIII. 参考文献

- 1 プロ野球選手会公式ホームページ「日本プロ野球選手会とは」・日本プロ野球選手会がめざしていくもの
<http://jpdpa.net/purpose//>
- 2 Jリーグ公式サイト「百年構想」
<http://www.j-league.or.jp>
- 3 野球用品専門店スワローズスポーツ
<http://www.4860.jp/>
- 4 日本野球機構オフィシャルサイト
<http://www.npb.or.jp/>
- 5 サッカーの歴史と現状
<http://kojo-com.main.jp/nyuumon.00101soccer.page01.html>
- 6 プロ野球前史
<http://probaseball.ojaru.jp/chronological-baseball.html>
- 7 財団法人日本サッカー協会
<http://www.jfa.or.jp/jfa/history/index.html>
- 8 日本プロフェッショナル野球組織・日本野球連盟・日本学生野球協会・全日本大学野球連盟・日本高等学校野球連盟・全日本軟式野球連盟／編集
「公認野球規則 2011」
- 9 日本サッカー協会審判委員会 / 〔訳〕 編集制作
「サッカー競技規則 2010/2011」
- 10 toto 公式サイト
<http://www.toto-dream.com/index.html>
- 11 プロ野球フリーク
<http://baseball-freak.com/>
- 12 ESPN

- <http://espn.go.com/mlb/attendance>
- 13 スポーツマネジメントにおける新たな価値創造の在り方
http://www.waseda.jp/sem-inoue/file/archives/2011_sotsuron_sports.pdf#search='プレミア%20総収入'
- 14 国税庁
<http://www.nta.go.jp/>
- 15 サッカーＪリーグ年俸名鑑
<http://jsalary.wiki.fc2.com/wiki/%E2%96%A02011%E5%B9%B4%E2%96%A0>
- 16 高林喜久生（2004）
「『今年も阪神優勝！』の経済学」光文社新書
- 17 高林喜久生（2005）
「格差とは何か」『経済セミナー』日本評論社、2005年8月号
- 18 日刊スポーツ
『2011年プロ野球選手写真名鑑』
- 19 総務省ホームページ「平成21年全国消費実態調査」
<http://www.soumu.go.jp/>
- 20 公益財団法人日本オリンピック協会
<http://www.joc.or.jp/sports/baseball.html>
- 21 財団法人野球体育博物館
<http://www.baseball-museum.or.jp/index.html>
- 22 サッカー用品ショップ
<http://www3.ocn.ne.jp/~auby/>
- 23 サッカーについて
<http://soccernituite.com/index.html>
- 24 メジャーリーグのすべて
<http://www.amstkk.net/index.html>
- 25 J SPORTS プレミアリーグナビ
http://www.plus-blog.sportsnavi.com/jsports_premier/article/526
- 26 日本プロ野球選手会公式ホームページ
<http://jpbpa.net/>

